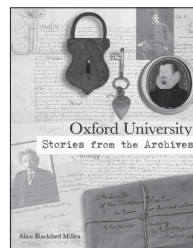


書評

Alice Blackford Millea 著 『Oxford University: Stories from the Archives』



Bodleian Library,
University of Oxford/
2022年5月/
Hardback/208頁/
定価 £30.00

津久井 恵子
Keiko Tsukui

1. はじめに

本書はオックスフォード大学の大学アーカイブズのAssistant Keeper、アリス・ブラックフォード・ミレア（Alice Blackford Millea）によって執筆された。Assistant Keeperとはオックスフォード大学のアーカイブズの管理者であるKeeper of the Archives（以下、Keeper）を補佐する専門職員である。大学アーカイブズは1634年に同大学のボドリアン図書館（Bodleian Library）内に設立され、13世紀初頭から現代に至るまでの800年以上にわたる大学の活動の記録を保管している。本書では、そのうち52点の史料を紹介し、それに関わる大学の歴史を解説している。

2. 本書の内容と所感

本書の序文ではアーカイブズやアーキビストの役割、オックスフォード大学の歴史及び同大学の大学アーカイブズの概要について触れられている。その後の本編では、各項目は13世紀初頭から現代まで、おおそ時代順に並んでおり、それぞれ独立したものとなっているが、複数の項目にわたって共通するテーマも存在する。いずれのエピソードも大変興味深く、どこから読んでも楽しめる構成となっているが、紙面の都合もありここでは個人的に印象に残ったテーマに関わる項目を中心に紹介する。

まず、序文及び本編のアーカイブズに関連する項目について述べる。これらの項目において語られていることの内、多くの読者にとって意外に思われるであろう点は、オックスフォード大学がイギリスで最も古い大学であるにもかかわらず、自身が所有する歴史的価値ある記録を残すことについては、長い間無頓着であったといえることである。一般的に大学アーカイブズの事業では、年史編纂が契機となって史料の収集・整理が進み、創立者の顕彰や建学の理念の継承といった目的のもとアーカイブズの設置につながるケースが多い。しかし、オックスフォード大学においては、長きにわたって自身が持つ記録をその歴史的価値ゆえに後世に伝えていくという発想が存在していなかった。また、1634年に設立されたオックスフォード大学のアーカイブズ及びその管理者であるKeeper of the

Archivesの役職は400年近い歴史を持つものである。しかしながら、長い間歴代Keeperにとってアーカイブズの業務は、あくまでも自身の研究者としての業務の合間に行う活動に過ぎなかった。それゆえ、記録の評価選別の基準もその時々Keeperによって大いに異なっていた。アーカイブズが一貫した管理のもとに置かれるのは、Keeperを補佐するために専門職としてのアーキビストが採用されるようになった1970年代に入ってからであった¹⁾。また、本書の著者であるアリス・ブラックフォード・ミレアの役職でもあるAssistant Keeperは2001年に新設されたものである (pp. 17-18, Introduction、以下掲載ページと見出しを示す)。

アーカイブズ設置以前のオックスフォード大学においては、名誉総長、総長、学生監らの業務の助けになるように記録をつける習慣自体は早い段階で存在していた。14世紀以降、約3世紀にわたって代々の名誉総長に受け継がれてきた書物には、国王からの勅許状など重要文書の写しや諸規則など業務に必要な文書がまとめられていた (p. 26, The Chancellor's Book)。しかし、記録管理は必ずしも常に順調に運んだわけではなかった。大学の記録は貴金属などとともに保管庫に保存されていたが、時代が下るにつれ記録の量が増え、管理責任の所在もあいまいになっていったため、15世紀には整理がつかない状態になっていた。これを受けて、名誉総長や学生監とともに記録の整理にあたる委員が教員の中から任命されるものの、前述の通り、史料的高い記録を残すという発想は存在せず、その時点における必要性を基準に評価選別がなされた。さらに、1544年に大学内に強盗が押し入り、大学は金銭的な打撃を受けるとともに、保管庫にあった文書も破損・散逸するなど大きな被害を受けた (pp. 35-36, The Great Burglary of 1544)。

1634年になって大学のボドリアン図書館内にアーカイブズが設置されたのも、やはり、歴史的関心によるものではなく、後述するオックスフォード市との市内の権益をめぐる紛争において自らが有利になるように証拠を残しておくことが求められたからであった。1620年代から1630年代にかけて、大学では、国王チャールズ1世の側近で名誉総長となるウィリアム・ロード (William Laud) の強い勧めにより大学のあらゆる法規を一本化するプロジェクトが実行された。事業にあたり、必要な調査を手掛けていたのは、大学の記録に関しては最も知識のある人物として知られていた古物学者のブライアン・トワイン (Brian Twyne) であった (p. 56, The Laudian Statutes)。トワインの働きに報いる形で、アーカイブズの管理者であるKeeper of the Archivesの役職が設置されたのであった。トワインはまた、初代Keeperとして国王からさらなる特権を得るための勅許状を求めるにあたり、根拠となる先例を求めて大学に残っている史料の調査に時間を費やし、彼の知見は大学と市の法廷闘争において強力な武器となった (p. 59, 'Mechanicall Persons')。

1——本書では言及されていないが、2000年にサイモン・ベイリー (Simon Bailey) がフルタイムのアーキビストとして初めてKeeperに就任した。https://web.archive.org/web/20110609225650/http://www.ox.ac.uk/gazette/2000-1/weekly/210900/notc.htm#10Ref (Oxford University Gazette, University of Oxford, 21 September 2000. のウェブアーカイブ。http://www.ox.ac.uk/gazette/2000-1/weekly/210900/notc.htm) 2022年11月25日最終閲覧。

1642年から始まったイングランド内戦においては、オックスフォードの街はチャールズ1世が率いる国王軍の拠点となり、アーカイブズがあるボドリアン図書館は武器庫として使用された。1646年に国王がロンドンに逃れた直後、オックスフォードは議会軍によって包囲された。停戦交渉の結果、議会に服従することと引き換えに大学と街の安全が保障された。この交渉には2代目Keeperであるジェラルド・ラングベイン (Gerard Langbaine) も関わっていた (pp. 67-68, *The Civil War*)。

これらの項目から読み取れるのは、アーカイブズが歴史資料としてではなく、当初は大学の日常の業務の助けとなるもの、そして自らの利益を守るための証拠としての価値を持つものであると認識されていた点である。日本の大学アーカイブズは、年史編纂事業を機に整備が進んだ場合が大半であるが、近年は特に国立大学において、アーカイブズに大学のアカウントビリティを果たす役割が期待されている。もっとも、オックスフォード大学の場合、その動機は社会に対して説明責任を果たすという公益的な性格というよりは、自らの権益を守るといった利己的な性格が強いものであったという印象である。とはいえ、アカウントビリティのためのアーカイブズともいえる発想がオックスフォード大学では400年近く前に存在していたという点は興味深い。

その一方で、出版物については後世に残す試みがなされていた。ボドリアン図書館の創設者であり、その名の由来となったトマス・ボドリー (Thomas Bodley) は、1610年にロンドンの書籍出版業組合との間に、出版物は全て1部を大学に納本するよう恒久的な契約を結び、イングランドで出版された全ての本を図書館で所蔵することを試みた。この試みは結局不首尾に終わり、実際に大学に納本された本は一部に過ぎなかったが、1709年の最初の著作権法に定められた納本制度につながった (pp. 47-48, *The Beginnings of a Copyright Library*)。

そして、アーカイブズが大学のみならず、地域の歴史にとっても重要なものであることを示すのが次に挙げるオックスフォード市と大学との関係の歴史についての項目である。今日では大学都市として世界中にその名を広く知られているオックスフォードであるが、大学と市の関係性は長い間良好とはいえないものであり、「タウン (街) とガウン (大学) の争い」と呼ばれる対立が何世紀にもわたって続いてきた。1209年に市で起こった殺人事件の容疑者として学生2名が死刑に処せられたことから、大学は一時オックスフォードより離れた (この時オックスフォードから離れた学者の一部は後にケンブリッジ大学を設立した)。その後、教皇特使の仲介により大学がオックスフォードに復帰することを認められるとともに、学生を処刑したことへの賠償として、市は大学に対して、毎年貧しい学生の支援のため52シリングを支払う、市内の商人は学生に安価で食品等を提供するなど、大学の市に対する特権が認められることになった。この時の教皇特使による1214年の仲裁裁定状は大学アーカイブズに現存する最も古い史料の一つである (pp. 20-22, *University Returns to Oxford*)。

1355年の聖スコラスティカの日にはパブでの学生と市民の喧嘩を発端として起きたとされる暴動は、市と大学双方に死者が発生するほど悪名高いものであった。大学は王室からの

庇護を受けていたため国王エドワード3世はオックスフォード市側にこの事件の非を認めさせた。その結果、大学は市内の商取引や治安維持においてさらなる特権が認められたのに対し、市は大学に対して毎年賠償金を支払うほか、市長らは暴動で亡くなった学生の追悼ミサに毎年出席することを義務付けられた (pp. 29-31, St. Scholastica's Day Riot)。その後も様々な権利をめぐる両者の間ではしばしば争いがあり、13世紀から17世紀の間には市内の清掃という現代では想像のつき難い事柄をめぐる対立が起きた一方で、両者は疫病対策のために協力することもあった (pp. 69-70, Keeping the City Clean)。

また、1702年にアン女王がオックスフォードを訪問した際に、女王に随伴する総長や教員が興奮した群衆に押し出されるという出来事があった。これを受けて大学はオックスフォード市長に対し苦情を申し立て、これに対し市長は反発したため、大学は4人の市民を大学との取引から「締め出す」処分を下した。さらに、今後再び王族が市を訪れた際の大学と市の職員の行列の並び順の提案をめぐる、大学と市で一悶着があった。この一連の諍いの過程では大量の文書が作成され、それらは重要文書として専用の革袋に入れて保管されていた (pp. 78-80, The Brawl at the Visit of Queen Anne)。

両者の関係は19世紀頃から改善の兆しが見え、市と大学が正式に和解するのは聖スコラスティカの日の暴動から600年後の1955年のことであった (pp. 172-174, Town/Gown Reconciliation)。

最後に、女性と大学にまつわる項目について触れておきたい。大学アーカイブズに残されている史料は社会における女性の立場の変化も読み取ることができることから、女性史においても高い史料価値を持っているといえるだろう。本書を初めから順に読んだ場合、後半に差し掛かるまで女性の存在は(18世紀にオックスフォードを訪問したアン女王を除けば)全くと言ってよいほど語られてこない。ようやく女性に言及されるようになるのは、19世紀後半になってからの話である。この時代、女性の存在は大学にとって脅威と認識されていた。当時、学生数の増加により大学外で下宿せざるを得ない学生が出ると、未成年の学生が規則の厳しい学寮ではなく、大学外で暮らすことによって風紀が乱れることを懸念する声が大学内外で出た。さらに外部からは、下宿に雇われている使用人には売春婦や「評判の悪い女」もいるとする激しい批判もあり、大学は下宿人や全ての下宿における女性の使用人の数について調査をする羽目になった (pp. 112-114, The 'Mischievous Consequences' of Lodging Houses)。また、市内では少なくとも学部生数の5分の1以上の売春婦が存在したとされ、大学警察は市内の巡回や売春宿の捜査など、その対処に追われた。その際、明白な証拠もなく若い女性が売春の疑いをかけられて投獄される一方、彼女らと関係をもった学生が罰せられるケースは極めて稀であるという不公平さがメディアでは批判された (pp. 122-126, The Problems of Prostitutes)。

その一方で、19世紀後半は女性の高等教育の機会を求める運動が起こった時代でもある。こうした運動に圧され、オックスフォード大学では1877年から男性とは別に「女性のための試験」を受けることが認められるようになり、1879年以降5つの女性専用のカレッジ(当初はソサエティ (Society) と呼ばれ、正式なカレッジとしてはみなされていなかった)

が設立される。しかし、女性は大学の正式なメンバーとみなされず、授業や試験を受けることができても学位を得ることはできなかった。19世紀末より女性が正規の学生として受け入れられるよう提案が何度かなされたが、それが実現するのは第一次世界大戦終結後の1920年のことであった (pp. 141-144, *The Admission of Women*)。また、男性と同席して授業を受けることができるようになったのは、20世紀初めに正規の学生以外を対象とした1年間の研究科であるディプロマ (Diploma) が導入されてからである。

大学アーカイブズには、人類学のディプロマを修了したマリア・アントニーナ・ツァプリカ (Maria Antonina Czaplica) が師であるロバート・ラルフ・マレット (Robert Ralph Marrett) に宛てた手紙が残されている。そこには、彼女が当初はシベリアにおける集団結婚について講演をするつもりであったが、「レディには甚だふさわしくない」という理由でテーマを考え直さざるを得なかった旨が記されている。ツァプリカは後にオックスフォード大学初の女性の人類学の講師になるが借金に苦しみ、志半ばで自殺を遂げる (pp. 133-136, *Pioneer Women in Anthropology*)。

女性の入学が認められた翌年の1921年には、オックスフォードにおいて長年女性の高等教育に貢献したシャーロット・バイロン・グリーン (Charlotte Byron Green) とエリザベス・ワーズワース (Elizabeth Wordsworth) の2人に対して、女性として初めての名誉学位が授与された。しかしながら、この2名の女性に授与されたのは、通常授与される名誉博士号より一段格下の名誉修士号であり、かつ授与が行われたのは名誉学位授与の主要な場である大学記念祭においてではなかった。この経緯について、大学アーカイブズに残されている議事録にはほとんど言及がない。これについて筆者は、女性の教育の機会を求めて長年大学と闘ってきた女性に対して大学が名誉学位を与えるということに、大学側が皮肉を感じていたからかもしれないと推測したうえで、記録がほとんど残っていないという事実がかえってこの出来事の重大さを物語っていると指摘している (pp. 145-146, *Women and Honorary Degrees*)。

こうした19世紀後半から20世紀初頭の一連の女性に関するエピソードには、当時の社会における女性の立ち位置が如実に表れているといえる。しかし、それから約100年後の2016年に、ついにルイーズ・リチャードソン (Louise Richardson) がオックスフォード大学史上初の女性総長に就任する。ラテン語で総長の女性形である、“Vice-Cancellaria”という単語が初めて用いられた総長就任式の式次第の紹介をもって、本書は幕を閉じる (pp. 189-190, *Admission of the First Female Vice-Chancellor*)。

3. おわりに

序文において著者は、本書は大学の歴史についての本ではないと述べている。その言葉通り、本書で取り上げられている史料は大学の歴史にとどまらず、地域の歴史、王室との結びつき、戦争、女性の社会進出などイギリスの社会と文化の歴史を語る上で高い価値を持つものである。それゆえ、アーカイブズ学やオックスフォード大学に関心を持つ人に限

らず、イギリス史全般に興味を持つ人にも薦めたい1冊である。

大学や企業など、特定の組織の歴史というと、一般的にその組織の関係者以外にとってさほど興味を惹くものではない場合もあるが、本書のように広く一般にアーカイブズが所蔵する史料の内容を伝える本が世に出たのは喜ばしいことである。

また、紹介されている史料は色鮮やかに装飾されたものから、タイプライターで打たれた文書やモノ史料まで多岐にわたり、一つ一つの項目が短く読み易いため初学者でも楽しめる。さらに、掲載されている図版はフルカラーでサイズが大きいため史料の細かい点まで見て楽しむことができるのも本書の魅力である。

一つ評者の希望を述べるならば、本書で取り上げられているのは種類こそ様々であるがいずれも「アナログ」な史料であり、「デジタル」な史料にも本編で言及があってもよかったのではないかという点である。コンピューターの普及は大学の業務や研究に極めて大きな影響を与え、デジタルメディアの登場は大学の記録管理のあり方に大きな変化をもたらしたはずである。世界有数の歴史と規模を有するオックスフォード大学において、このような時代の転換点には、興味深いエピソードが多々あるのではないだろうか。

日本の大学においても、近年ではアーカイブズへの関心が高まりつつある。その一方、リソースの問題から発展途上の段階にある大学が大半だろう。オックスフォード大学と日本の大学では、歴史的背景の面でも規模の面でも大いに異なるため、一概に比較することができないのは確かである。しかし、本書で述べられているように、オックスフォード大学のアーカイブズが辿ってきた歴史も決して順風満帆なものではなかった。日本でも、それぞれの大学アーカイブズが所蔵する史料の魅力を積極的に発信することを通して、大学アーカイブズがその大学の関係者のみならず、社会にとって大きな意義を持つものであるという認識が一般に広まり、大学アーカイブズのさらなる発展につながることに期待したい。